高松市埋蔵文化財調査報告　第154集

高松市立林小学校校舎等建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

林宗高遺跡

—第3次調査—

2014年3月

高松市教育委員会

例　言

1　本書は，林小学校校舎増築建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり，林宗高遺跡第3次調査の報告を収録した。

2　発掘調査地及び調査期間，調査面積は下記のとおりである。
調 査 地：　高松市林町1108-1 高松市立林小学校地内
調査期間：　平成25年7月22日～8月21日
調査面積：　約123㎡

3　現地調査は，高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 小川賢と，同嘱託 中西克也，新井場萌が担当した。

4　整理作業は小川，新井場が担当した。

5　本報告書の執筆・編集は新井場が担当し，小川が補佐した。

6　発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係諸機関に御協力を得た。記して厚く謝意を表する。
高松市立林小学校

7　本報告書の高度値は海抜高を表し，方位は座標北を表す。

8　以下の業務については、委託業務として行った。
基準点打設：株式会社四航コンサルタント
遺物写真撮影：杉本和樹（西大寺フォト）

9　発掘調査で得られたすべての資料は，高松市教育委員会で保管している。

10　G.Nは座標北を示す。

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過
第1節　調査の経緯・・・・・・・・・・・・1
第2節　調査区の概要・・・・・・・・・・・1
第3節　調査日誌・・・・・・・・・・・・・2
第4節　周辺における既住の調査・・・・・2
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境
第1節　地理的環境・・・・・・・・・・・・3
第2節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・3
第Ⅲ章　調査の成果
第1節　調査方法・・・・・・・・・・・・・5
第2節　基本層序・・・・・・・・・・・・・5
第3節　第1遺構面の遺構・遺物・・・・・9
第4節　第2遺構面の遺構・遺物・・・・・11
第5節　遺構面精査の遺物・・・・・・・・11
第Ⅳ章　まとめ
第1節　遺跡の時期的変換
（1）弥生時代（2）近世～近代・・17
第2節　遺跡の広がりと旧地形について・・・17

挿　図　目　次

第1図　発掘調査対象地と周辺の調査履歴図…1
第2図　高松平野の地形図と遺跡位置図・・・3
第3図　林宗高遺跡と周辺の主要遺跡分布図…4
第4図　第1遺構面配置図・・・・・・・・・6
第5図　第2面遺構配置図・・・・・・・・・7
第6図　調査区北壁東壁土層図・・・・・・・8
第7図　SK101,SK102,SK103,SK104,SK105
平・断面図・・・・・・・・・12
第8図　SD101,SX101,SP205平・断面図・・・13
第9図　SK106,SK107,SK108,SK110,SK201,断割り
トレンチ平・断面図・・・・・14
第10図　SK101,SK102,SK103,SK104
出土遺物実測図・・・・15
第11図　SK105,SD101,SX101,SP205,遺構面精査
出土遺物実測図・・・16
第12図　調査地付近位置図・・・・・・・・17

挿　表　目　次

第1表　発掘作業工程表・・・・・・・・・・2
第2表　整理作業工程表・・・・・・・・・・2
第3表　遺物観察表・・・・・・・・・・・・18
第4表　石器観察表・・・・・・・・・・・・18

写真図版目次

図版1　第1遺構面検出状況（西から）
第1遺構面検出状況（東から）
第1遺構面全景（東から）
第2遺構面全景（東から）
図版2　SK101完掘（南から），SK102,103完掘（南から），SK102断面（南から），SK102完掘（南から），SK104断面（西から），SK104完掘（南から），SK105断面（北から），SK105完掘（南から）
図版3　SK106完掘（南から），SK107断面（南から），SK107完掘（南から），SK110断面（西から），SK110完掘（東から），SD101断面（東から），SD101完掘（北西から），SD102完掘（北東から）
図版4　SX101畦断面（南西から），SX101完掘（南西から），SK201断面（東から），SK201完掘（東から），SP202,SP203,SP204,SP205完掘（北から），断ち割りトレンチ断面（北西から），北壁土層（東南から），東壁土層（西から）
図版5　出土弥生土器，SK104出土遺物
図版6　SK102,SK104出土遺物，SK103出土遺物，出土石器，遺構面精査出土遺物，出土骨角器
図版7　SK105出土遺物，SX101出土遺物，SD101出土遺物，SK102出土遺物，出土ガラス瓶

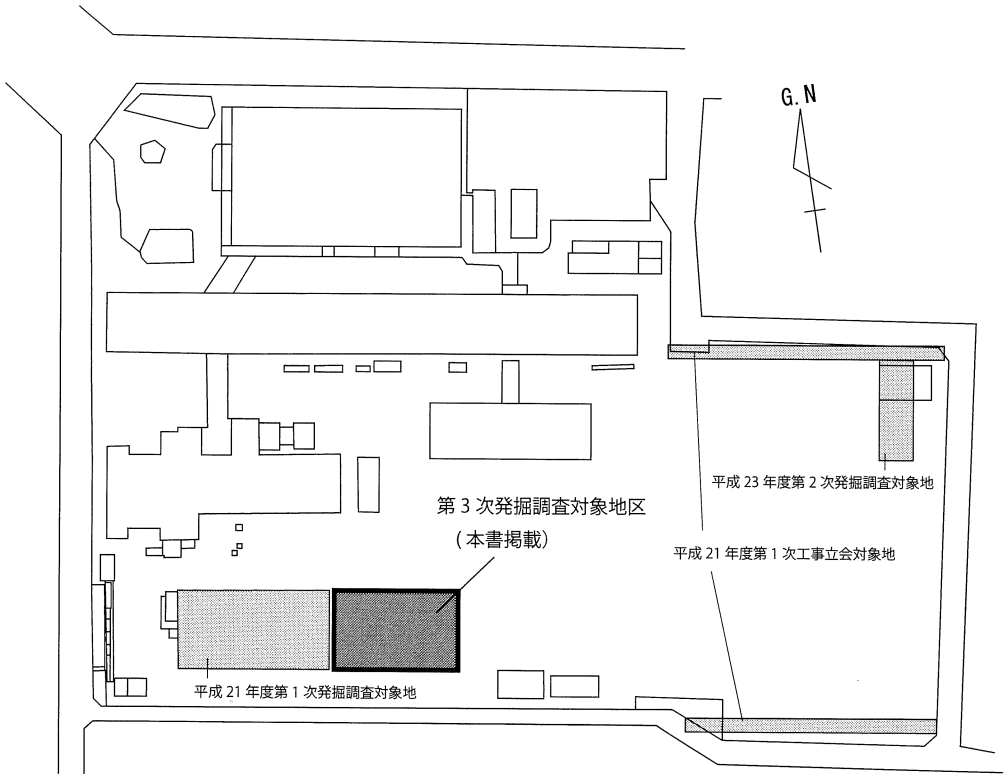
第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第1節　調査の経緯

本調査地は，本市教育委員会総務課（以下教委総務課と呼称）による，高松市立林小学校舎増築工事予定地にあたり，周知の埋蔵文化財包蔵地「林宗高遺跡」内に位置する。高松市長から平成25年4月14日付けで高松市教育委員会（以下本市教委と呼称）に対して，建設事業計画に基づき，文化財保護法第94条の発掘通知があったため，本市教委は香川県教育委員会（以下県教委と呼称）へ進達したところ，平成25年5月13日付けで県教委から「発掘調査」の行政指導を受けたものである。これを受け，本市文化財課は教委総務課と協議を行い，建設工事に先立ち発掘調査を実施し，記録保存を行うことで合意したため，同年7月22日付けで同法第99条第1項の規定による着手届けを提出するとともに，同日より同年8月21日まで，発掘調査を実施した。現地調査を終了後，所轄の警察署へ同法第100条の規定による通知を，同年8月21日付けで行った。本書はこの発掘調査の成果を報告するものである。

第2節　調査区の概要

調査地は南北長約8.40m，東西長約14.80 mの長方形の北辺に，東西4m，南北約1.60 mの長方形が接した形状を呈する。（第1図）。調査に当たり2点の基準点を設定して記録を行った。



第1図　発掘調査対象地と周辺の調査履歴図

第3節　調査日誌

発掘作業および整理作業の実施状況は下記のとおりである。

第1表 発掘作業工程表

作業項目		7月							8月										
		22	23	25	26	29	30	31	1	2	5	6	7	8	9	12	19	20	21
		月	火	木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	月	火	水
事前調査/準備/委託業務																			
第1面	重機掘削																		
	掘削																		
	遺構面精査/遺構検出																		
	遺構写真撮影/図化																		
第2面	重機掘削																		
	掘削																		
	遺構面精査/遺構検出																		
	遺構写真撮影/図化																		
埋め戻し/撤収																			

第2表 整理作業工程表

作業項目	H25 9月	H25 10月	H25 11月	H25 12月	H26 1月	H26 2月	H26 3月
洗浄							
接合・復元							
遺物実測							
遺物トレース							
遺構トレース							
図版レイアウト							
遺物写真撮影							
原稿執筆							
編集							
校正							

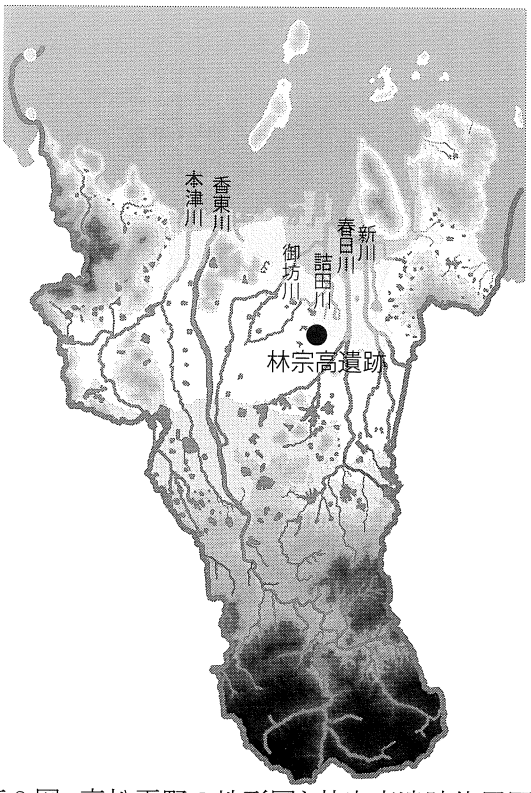
第4節　周辺における既往の調査

林宗高遺跡は林町1108番地1に所在し，地勢的には高松平野中央部のやや南東よりに位置する。本遺跡の周辺では，近年，高松東道路建設事業や空港跡地整備事業に伴う調査をはじめとして，大規模開発が数多くなされており，それらの事業に伴う調査例が数多く蓄積されている。また，弘福寺領讃岐国山田郡田図の調査（藤井ほか1992・山本ほか1999）に伴い，地形の変遷や古代の土地利用の詳細など，多岐にわたる調査・分析の対象となっており，高松平野でも調査の進展している地域であるといえる。しかし細かく見ると，本調査地の周囲250 mではこれまで発掘を伴う調査例がなく，調査の集中する地域の中でも考古学的には部分的な空閑地であった。本書に紹介する林宗高遺跡の調査内容は，こうした調査の隙間を埋めるという意味でも重要である。第3図に周辺の遺跡分布図を掲載したが，その中でも発掘調査の成果が報告書として刊行されているものについて第3図下欄に列記している。各調査の詳細はそれぞれの発掘調査報告書を参照いただきたい。なお，遺跡名の頭につく数字は第3図中の遺跡番号に対応する。

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第1節　地理的環境

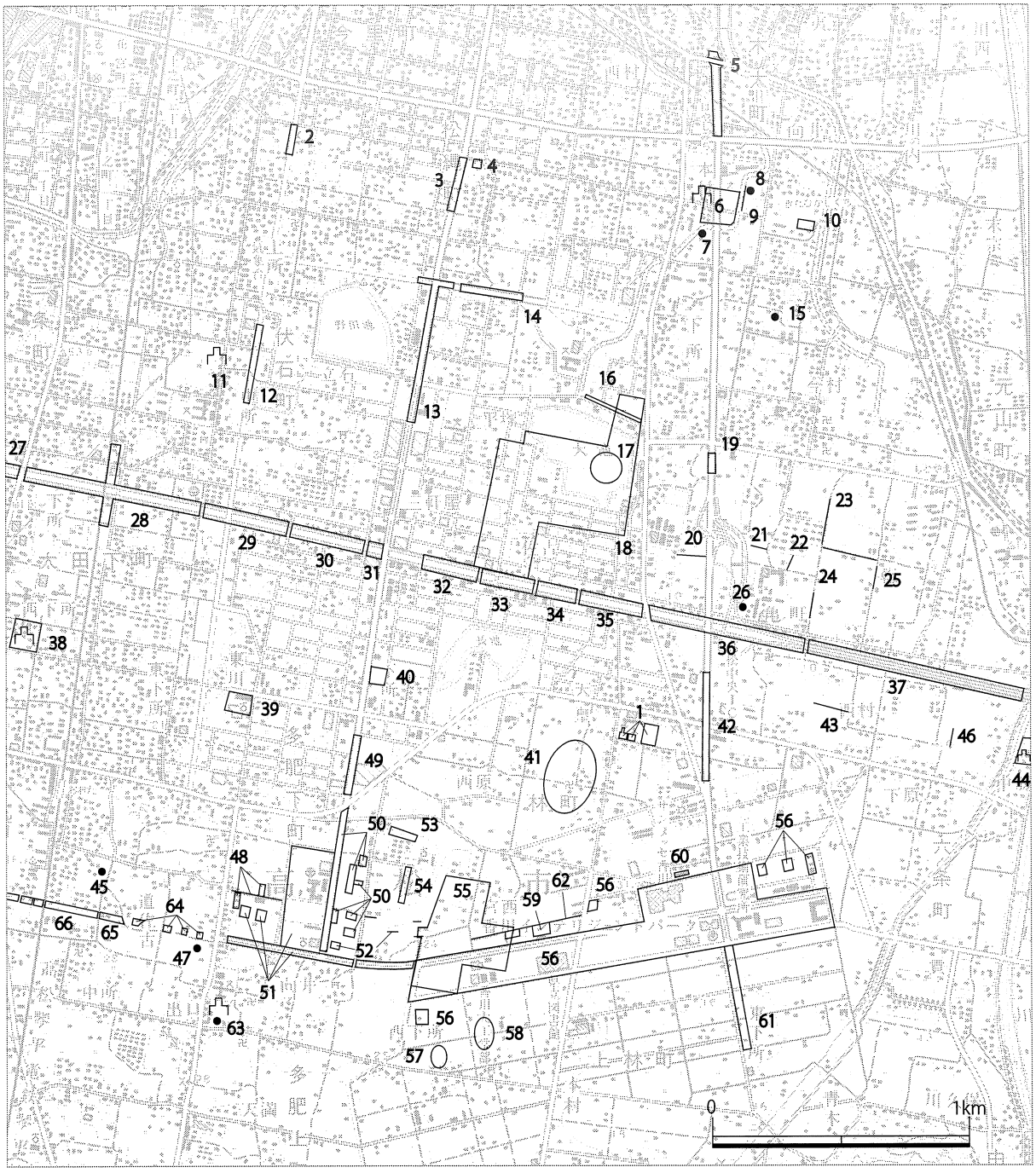
本遺跡の立地する高松平野は，平野を南北に貫く複数の河川の堆積作用により形成されたものである。平野には本津川，香東川，御坊川，詰田川，春日川，新川などの河川が流れるが，中でも香東川の堆積作用が最も強く，春日川の西側付近まで香東川の堆積作用による平野が広がる。また，これらの河川はいずれも近世に大規模な改変を受けている。香東川は現在では石清尾山山塊の西側のみ流れているが，古絵図などには本来山塊の東側も流れていた事が記されている。また現在は埋没しているが，平野中央部の林町から木太町にかけての範囲で複数の旧河道が存在したことが指摘されている。林宗高遺跡の周辺でも，長池や大池などを結ぶ旧河道の存在が推定されており，本遺跡の発掘調査でも北西に向かう旧河道を検出している。



第 2 図　高松平野の地形図と林宗高遺跡位置図

第2節　歴史的環境

はじめに，本遺跡が位置する歴史的環境を確認しておきたい。なお，詳細やその他の時期については，平成 21 年度・24 年度刊行の「林宗高遺跡」（高松市教育委員会 2010 年 3 月，2012 年 3 月），を参照いただきたい。高松平野では，縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて集落の形成が顕著に認められている。本遺跡周辺の平野中央部でも，井手東Ⅱ遺跡などの縄文晩期から続く遺跡が多く確認されている。また，さこ・長池遺跡では弥生前期～中期前葉まで連続した居住が確認されているが，継続する集落は少なく，この時期には段丘化によって平野部の堆積が一気に進行することが指摘されており，こうした自然環境の変動も一因であったと考えられる。新たに生活の痕跡が認められるのは中期中葉以降であり，上天神遺跡などで居住の痕跡が確認されている。中期後半～後期前半にかけては，太田下・須川遺跡などで集落跡が確認されている。後期後半には，空港跡地遺跡などで再度集落が形成され，一部はその後，終末期から古墳時代前期前半まで継続する様子が認められる。本調査地が位置する林宗高遺跡で検出されている遺構もこの時期に属している。古代の高松平野では，古墳時代後期～古代の前半にかけて，それまで集落域の営まれていた微高地が埋没したとされ，それに伴い集落の断絶と形成が確認されている。平野は大きく西部の香川郡，東部の山田郡に分割され，平野部のほぼ全面に南北線が東に約9～11°傾く条里地割が分布する。この条里地割に沿った溝や建物跡が松縄下所遺跡，空港跡地遺跡などで検出されている。また，周辺では拝師廃寺などの古代寺院が確認され，平成 21 年度に報告書が刊行されている。中世以降では，東道路関連の弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区比定地などで，旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画の水田面が検出されており，その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから，この時期までに現在の地形環境がほぼ形作られていたと推測されている。本遺跡周辺ではキモンドー遺跡で佐藤城の堀が検出されている。居住域としては，空港跡地遺跡で古代～中世の集落の変遷が詳細に検討され，当該期の高松平野を考える上で重要な知見が得られている。また，東山崎・水田遺跡，川南遺跡では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた近世集落跡や耕土層が発掘されている。



1. 林宗高遺跡　2. 鹿原遺跡　3. 天満宮西遺跡　4. 松縄城跡　5. 木太中村遺跡　6. 神内城跡　7. 木太本村Ⅱ遺跡
8. 白山神社古墳　9. 木太本村遺跡　10. 向城跡　11. 佐藤城跡　12. キモンドー遺跡　13. 松縄下所遺跡
14. 境目・下西原遺跡　15. 大荒神古墳　16. 上西原遺跡　17. 大池遺跡　18. 弘福寺領田図北地区比定地
19. 木太町九区遺跡　20. 林さこ遺跡　21. 林下所遺跡　22. 林下所遺跡　23. 林下所・木太今村遺跡　24. 林下所遺跡
25. 林下所・六条乾遺跡　26. 林下所遺跡　27. 上天神遺跡　28. 太田下須川遺跡　29. 蛙股遺跡　30. 居石遺跡
31. 井手東Ⅱ遺跡　32. 井手東Ⅰ遺跡　33. さこ長池Ⅱ遺跡　34. さこ長池Ⅰ遺跡　35. さこ松ノ木遺跡　36.　林坊城遺跡
37. 六条上所遺跡　38. 太田城跡　39. 汲仏遺跡　40. 多肥下町下所遺跡　41. 天皇西原遺跡　42. 宗高坊城遺跡
43. 六条西村遺跡　44. 六条城跡　45. 北原遺跡　46. 六条上川西遺跡　47. お茶荒神　48. 松林遺跡　49. 凹原遺跡
50. 日暮・松林遺跡　51. 多肥松林遺跡　52. 多肥宮尻遺跡　53. 池の内遺跡Ⅱ　54. 池の内遺跡Ⅰ
55. 弘福寺領田図南地区比定地　56. 空港跡地遺跡　57. 畑遺跡　58. 拝師廃寺　59. 一角遺跡　60. 公務員宿舎遺跡
61. 上林遺跡　62. 宮西・一角遺跡　63. 高木城跡　64. 多肥平塚遺跡　65. 多肥北原遺跡　66. 多肥北原西遺跡

第 3 図　林宗高遺跡と周辺の主要遺跡分布図

第Ⅲ章　調査の成果

第1節　調査方法

調査対象地は高松市立林小学校の校庭に位置する，校舎増築建設予定地である。第Ⅰ章で述べたとおり，本書では校舎増築建設予定地の調査成果を報告する。発掘調査は重機による遺構面までの掘削と，人力による遺構の掘削を基本として行った。記録に際しては2点の基準点を設定し，基準点をもとに図化を行った。図面は平面図・断面図ともに縮尺 1/20 で作図した。写真撮影は 35mm フィルムカメラを主に用い，モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録した。また，補助的にデジタルカメラも用いて記録を行った。

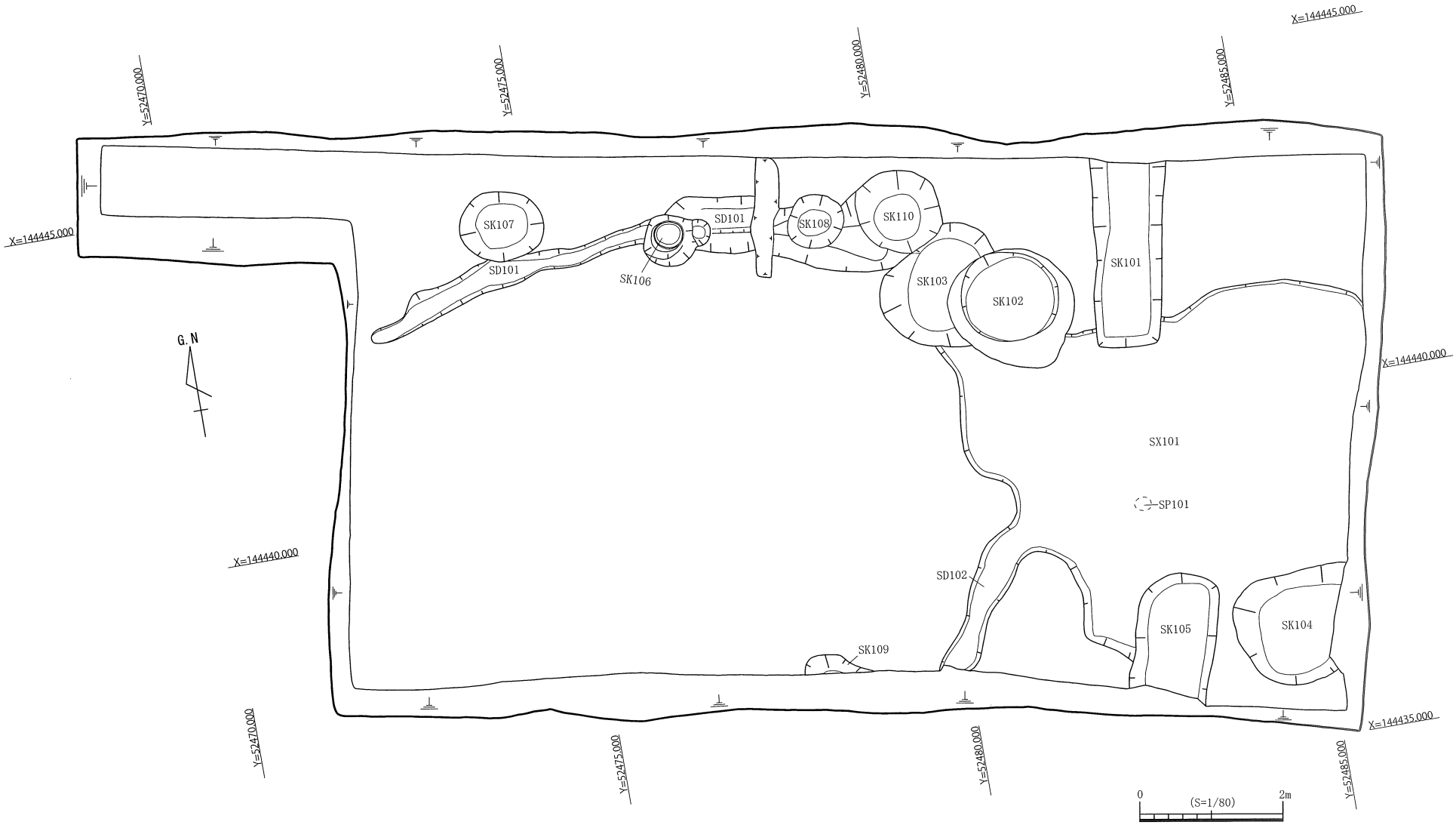
第2節　基本層序（第6図参照）

調査区は，東西長約 18m，南北長約8m の長方形を呈する。ここでは調査区の北壁・東壁の土層断面から基本層序の記述を行うこととする。

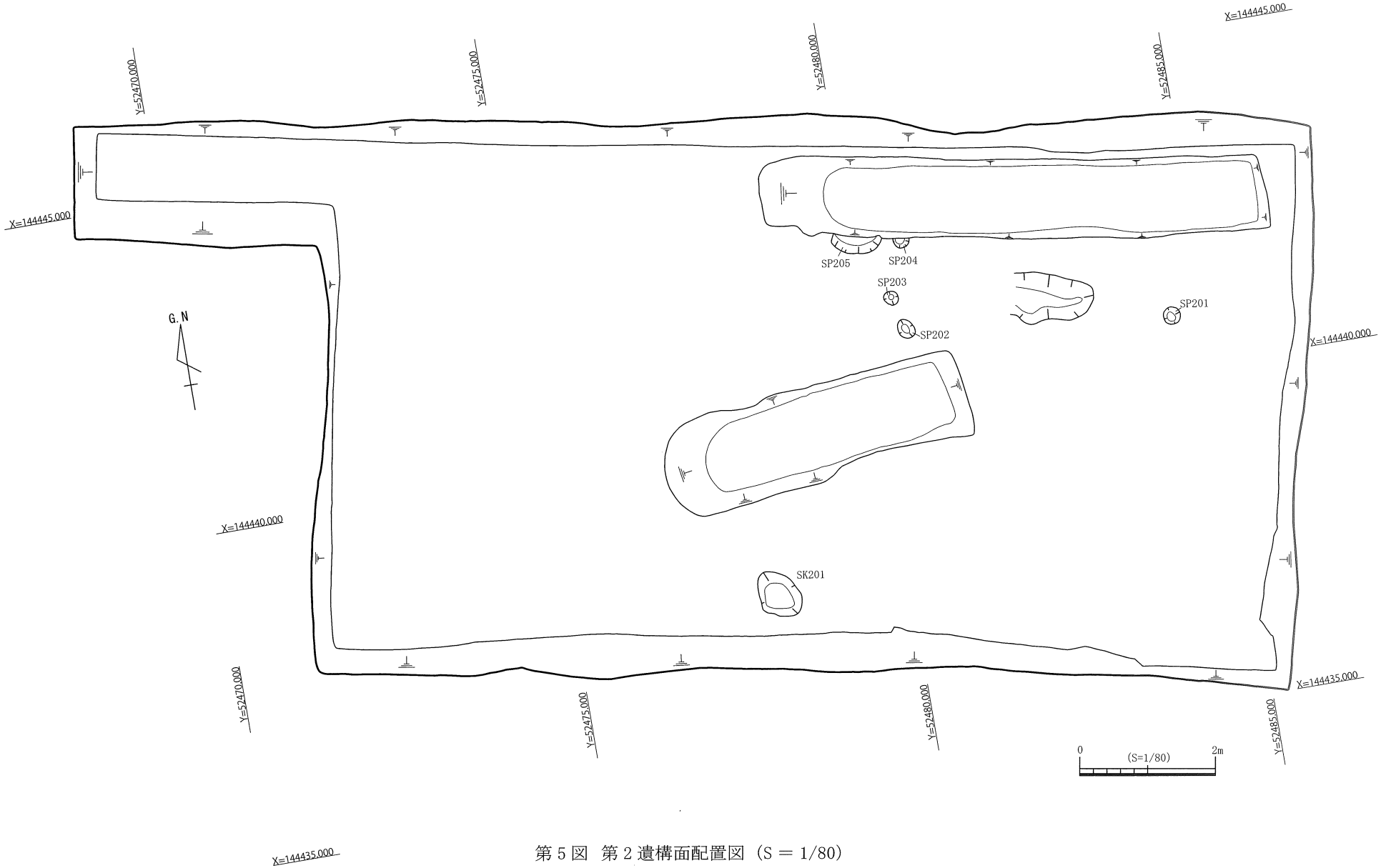
調査地の現状は校庭であり，現地表面第1層は花崗土で，20 ～ 30cm の深さで造成されている。下層には，礫や漆喰を含む整地に伴う造成土が東側を中心に 10cm 程度堆積している（第2層）。その下位には，灰白色のシルト質土が 20cm 程度堆積しているのが認められる（第3・4層）。

第1遺構面は，第3・4層の直下で認められる灰黄褐色（第5層）と褐灰色（第9層）を呈したシルト質土の上面で検出した。検出した遺構は，土坑(SK101 他)，溝(SD101 他)，性格不明遺構(SX101)，ピット(SP101)である。第 1 遺構面の基盤層は，第5・9層であるが，SK101 については，その上層の第3・4層を基盤としており，第 1 遺構面よりも後出する遺構面であることがわかる。また，第 5 層については，東側においてSX101 の埋土になっている。

第2遺構面は，第5・9・10・12 層の直下で認められる褐灰色（第6・11 層），にぶい黄橙色（第 13 層），灰黄色・灰白色（第 20 層）などの砂礫層上面で検出した。検出した遺構は，土坑（SK201），ピット（SP201 他）である。この第 2 遺構面の基盤層は西側は安定した砂礫層（第 6 層）が堆積し，東側に向けて傾斜している。この上層に第 11・13 層などの砂層が重なって堆積し，やや不安定な堆積となっている。第 2 面の遺構については，この不安定な砂層上でのみ確認された。

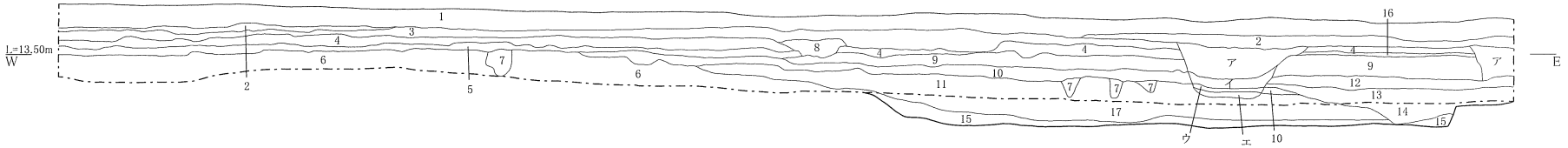


第４図　第１遺構面配置図（S ＝ 1/80）



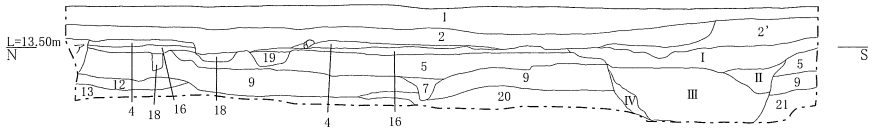
第５図　第２遺構面配置図（S ＝ 1/80）

北壁土層

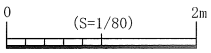


1:埋立土(花崗土)
2:10YR6/1 褐灰色シルト質細砂(炭, 漆喰を含む)埋立土
2':2層とほぼ同じだが, やや黄色
3:10YR7/1 灰白色シルト質細砂(礫, 漆喰を含む)
4:2.5Y8/2 灰白色シルト
5:10YR5/2 灰黄褐色シルト質細砂(10YR5/1 褐灰色シルト質細砂を含む)
6:褐灰色細～粗砂(小石, 礫を含む)
7:10YR4/1 褐灰色シルト質細砂ーピット
8:10YR6/1 褐灰色シルト質細砂(小石, 礫, レンガを含む)
9:7.5YR5/1 褐灰色シルト質細砂(10YR4/1 褐灰色細～粗砂・小石, 礫を含む)
10:10YR4/1 褐灰色細～粗砂(7.5YR5/2 灰褐色シルト質細砂・小石、礫を含む)
11:10YR4/1 褐灰色細～粗砂(小石を多少に含む)
12:10YR5/2＋10YR7/3 灰黄褐色シルト質細砂＋にぶい黄橙色シルト質細砂
13:10YR6/4 にぶい黄橙色細砂
14:10YR6/4＋10YR8/2 にぶい黄橙色＋灰白色細砂
15:10YR8/2 灰白色粗砂
16:2.5Y8/3 淡黄色シルト質細砂
17:11層とほぼ同じだが, 10YR3/1 黒褐色細砂を含む
18:2.5Y7/2 灰黄色シルト質細砂
19:2.5Y7/3 浅黄色シルト質細砂
20:2.5Y7/2＋2.5Y8/2 灰黄色シルト＋灰白色細砂
21:砂礫層
ア:2.5Y6/1 褐灰色シルト質細砂(石, 礫, レンガを含む)
イ:10YR7/2 にぶい黄橙色シルト質細砂(10YR7/1 灰白色シルト質細砂を含む)
ウ:10YR7/1 灰白色シルト質細砂
エ:10YR7/1 灰白色シルト質細細砂＋砂礫層

東壁土層



1:埋立土(花崗土)
2:10YR6/1 褐灰色シルト質細砂(炭, 漆喰を含む)埋立土
2':2層とほぼ同じだが, やや黄色
4:2.5Y8/2 灰白色シルト
5:10YR5/2 灰黄褐色シルト質細砂(10YR5/1 褐灰色シルト質細砂を含む)
7:10YR4/1 褐灰色シルト質細砂ーピット
9:7.5YR5/1 褐灰色シルト質細砂(10YR4/1 褐灰色細～粗砂・小石, 礫を含む)
12:10YR5/2＋10YR7/3 灰黄褐色シルト質細砂＋にぶい黄橙色シルト質細砂
13:10YR6/4 にぶい黄橙色細砂
16:2.5Y8/3 淡黄色シルト質細砂
18:2.5Y7/2 灰黄色シルト質細砂
19:2.5Y7/3 浅黄色シルト質細砂
20:2.5Y7/2＋2.5Y8/2 灰黄色シルト＋灰白色細砂
21:砂礫層
ア:2.5Y6/1 褐灰色シルト質細砂(石, 礫, レンガを含む)
Ⅰ:10YR7/3 にぶい黄橙色シルト質細砂
Ⅱ:10YR6/3 にぶい黄橙色シルト質細砂(小石を含む)
Ⅲ:砂礫層, 石(10YR6/3 にぶい黄橙色シルト質細砂を含む)
Ⅳ:2.5Y6/2 灰黄色シルト質細砂(小石を含む)



第 6 図 調査区北壁東壁土層図 (S ＝ 1/80)

SK101(第7，10図)

調査区北東端部，標高13.23mで検出した土坑。東西方向へ0.89m，南北方向に2.62mの長方形を呈し，深度は0.27mを測る。SX101を切って構築されている。遺物は，ガラス瓶(1)，点棒(2)，牌(3)の他に図化していないが，土師質土器，瓦，鉄製品，銅製品，ガラスが出土している。1は両側から型を合わせて作られ，気泡が多く含まれている。2は骨角器で全体が研磨されており，麻雀に使用される点棒と思われる。3は骨角器で全体が研磨されており，中央の模様（麻雀で使用される数牌の筒子）は掘り込んで作られている。出土遺物により，埋没時期は近現代と考えられる。

SK102(第7，10図)

調査区北東，標高13.27mで検出した土坑。東西方向に1.64m，南北方向に1.77mのほぼ円形を呈し，深度は0.56mを測る。断面は台形を呈し，埋土は3分割される。内側は径1.3mに掘削されており，平面が円形，断面は台形を呈し，20cm前後の円礫が多く充填されている。内側は円形の構造物が据え付けられていたと思われる。隣接するSK103を切って構築している。遺物は磁器皿(4)，磁器碗(5)，陶胎染付碗(6)（掘り方埋土から出土）の他に図化していないが，土師質土器（足釜），磁器，平瓦が出土している。4は肥前系の変形皿で，内外に草花文の染付がみとめられ，口縁端部には口紅が施されている。内面にビン痕がみとめられる。5は内外面に施釉を施している。外面には呉須の染付がみとめられる。6は内外とも施釉が施されており，表面に貫入がある。出土遺物により，埋没時期は17世紀末～18世紀代と考えられる。

SK103(第7，10図)

調査区北東，標高13.28mで検出した土坑。径約1.8mの円形を呈するとみられるが，東側をSK102，北側をSK110に切られている。深度は0.2mを測る。断面は台形を呈し，埋土は20cm前後の円礫を含む単層である。遺物は弥生土器底部(7)，弥生土器頸部(8)，土師質土器鍋(9)，備前系陶器擂鉢(10)，土師器羽釜(11)，平瓦(12)の他に図化していないが，弥生土器，陶器，焙烙，平瓦が出土している。7は両面共に磨滅している。平底を呈しており，体部との接合痕が認められる。器種は不明である。8は内面にナデ，外面にタテハケから沈線紋が施されている。9は口縁部，内面にナデとタテハケ，外面にヨコナデとナデが施されている。10は内面にヨコナデと擂目，外面にヨコナデと凹線を施している。擂目はナナメ方向に入っており，凹線は2条，外面顎部分が三角状を呈しており、口縁部は薄く，全体的にシャープな印象から，時期は備前焼近世1期b～c頃と思われる。11は取手部分で，接合面にナデが施されている。12は凸面にナデとケズリ，凹面にナデが施されている。出土遺物により埋没時期は17世紀末～18世紀代と考えられる。

SK104(第7，10図)

調査区南東端部，標高13.19mで検出した土坑。径約1.6mの不整形な円形を呈し，土坑東側は調査区外に及んでいる。深度は0.52mを測り，断面は台形を呈し，埋土は上層が5～20cmの円礫を多く含む。遺物は青磁碗(13)，施釉陶器底部(14)，土師質土器鍋(15)，土師質土器擂鉢(16)，備前系陶器擂鉢(17)(18)の他に図化していないが，土師質土器，須恵質土器，陶器，磁器，瓦器が出土している。13は外面に蓮弁染付が施されていると観察できることから龍泉窯系の青磁と思われる。内外面とも施釉が施されている。14は外面にケズリと塗土，内外面とも回転ナデが施されている。15は中世の煮炊き用鍋と思われ，内外面ともナデが施されている。16は内面端部はやや肥厚し，外面は直線的に内傾している。内面はナデと擂目，外面はハケとナデが施されている。17は内面にナデとナナメ方向の擂目，外面にナデと二条凹線が施されており，外面に重ね焼き痕，黄ゴマの付着がみられる。口縁下の顎が張り，断面が三角状であるため，時期は近世1期c～2期aと思われる。18は内面にナデと擂目，外面はナデと凹線が施されており，外面に重ね焼痕がみられる。擂目はナナメ方向に入っており，外面の口縁帯は2条凹線で，口縁下の顎が張り，断面が三角状であるため，時期は近世1期c～2期aと思われる。埋没時期は14の施釉陶器により，近世末～近代と考えられる。

SK105（第7，11図）

調査区南東側南端部，標高13.24ｍで検出した土坑。土坑南側は調査区外で及んでいるが，検出した規模は東西方向1.12ｍ，南北方向1.68ｍの長方形を呈している。深度は0.36ｍを測り，埋土は5～20㎝の円礫を多く含む土で充填している。遺物は弥生土器底部(19)，瓦質土器火鉢(20)，土師質土器風呂釜(21)，土師質土器七輪(22)，石鏃(23)の他に図化していないが，弥生土器，土師質土器，須恵質土器，陶器，焜炉，土師質人形が出土している。19は内面にヘラケズリ・ナデを施しており，外面には黒斑がみられる。器面は薄く，平底を呈している。20は口縁部は直線的に外傾し，端部は内側にやや肥厚するが，ほぼ直線的に内傾している。平面形は方形を呈していると思われる。内面はヨコタテ方向に板ナデ、内面は全体にミガキとナデが施されている。21は底部で，外面脚部に煤が付着している。内面はヨコ方向のナデ，外面はヨコ方向ナデ、指オサエを施している。22は内面は剥落しているが，煤が付着しており，目穴が2ヶ残存している。外面はナデを施している。23はサヌカイトを用いた打製の石鏃で，平基式である。出土遺物により，埋没時期は近世末～近代と考えられる。

SK106（第9図）

調査区北側中央，標高13.28ｍで検出した土坑。東西0.66ｍ，南北0.72ｍのほぼ円形を呈し，深度は0.23ｍを測る。断面は台形を呈す。近世末～近代所産のものと思われる土師質土器が設置されているが、中はモルタルが充填され廃棄されている。埋土は15㎝前後の礫を多く含むシルト質および土師質土器の留め土である。遺物は図化していないが，土師質土器片が出土している。埋没時期は近代と考えられる。

SK107（第9図）

調査区北側の西寄り，標高13.28ｍで検出した土坑。東西方向1.15ｍ，南北方向1ｍのほぼ円形を呈し，深度は0.25ｍを測る。断面は船底形を呈しており，中央に抜取痕のような堆積が観察され，大きさからSK106のような構造物が設置されていた可能性が考えられるが，埋土は最下層に礫を含む。遺物は図化していないが，土師質土器，須恵質土器，京信楽系陶器，陶器片が出土している。埋没時期は不明だが，SK106と同様の近代と推定される。

SK108（第9図）

調査区北側中央，標高13.20ｍで検出し土坑。径0.77ｍの円形で，深度は0.23ｍを測る。断面は台形を呈し，SD101を切って構築される。遺物は図化していないが，弥生土器が出土している。時期については不明であるが，SK106と同様の時期と考えたい。

SK109

調査区南側中央，標高13.34ｍで検出し土坑。南側が調査区外に及んでいる。検出された規模は，東西方向に0.83ｍ，南北方向に0.26ｍの楕円形を呈す。埋没時期は不明である。

SK110

調査区北側中央，標高13.15ｍで検出し土坑。東西方向に1.15ｍ，南北方向に1.2ｍの円形を呈し，深度は0.36ｍである。断面は船底形で，埋土は風化礫を含む黒色砂混じりシルト，褐灰色砂質シルトである。SK103とSD101を切って構築している。遺物は図化していないが，弥生土器が出土している。時期は不明であるが，SK106と同様の時期と考えられる。

SD101（第8，11図）

調査区北側中央，東から西に走る溝。標高13.25ｍで検出され，長軸は東西方向に6.38ｍ，幅は0.12ｍ～1.0ｍであり，深度は0.03ｍ～0.29ｍである。断面は船底形で，一度堆積したものを再掘削していると思われる。SK106，SK107，SK108，SK110に切られている。肥前系京焼風陶器(24)，遺物は弥生土器底部(25)の他に，図化していないが，土師質土器，須恵質土器，備前系陶器が出土している。24は内面のみ施釉が施されており，色調は両面とも浅黄色で，底部裏面に「清」とみられる刻印がみとめられることから肥前系京風焼と思われる。25は内外面ともマメツしており，胎土は粗く，4㎜以内の石英・長石を含んでおり，平底を呈している。胎土から前期に遡る可能性がある。遺物により埋没時期は，17世紀末～18世紀代と考えられる。

SD102

調査区南側中央東寄り，南から北東へ走る溝。標高13.32ｍで検出され，長軸は南東方向に2.63ｍ，幅は0.3ｍ～0.5ｍであり，深度は0.04～0.19ｍを測る。東側はSX101に繋がり，南側は調

査区外に及んでいる。断面は船底形を呈し，埋土は単層で，細砂混シルト質である。埋没時期は，SX101へと繋がることから近世と推定される。

SX101（第8，11図）

調査区東側，標高13.32mで検出した不成形の遺構。東側および南側は調査区外におよび，規模は不詳だが，南北・東西とも4～5m前後で検出された。深度は0.07mを図る。断面は台形で，埋土は2分割され，西側の上層が下層を切っている。遺構の重複関係については，SK101～SK105に切られており，SD102とは連続して確認した遺構である。出土遺物については，陶器碗(26)，弥生土器広口壺(27)がある。27の時期は讃岐第Ⅴ様式のうち，後期後半の所産であると考えられる。埋没時期については，SK102・SK103との重複関係から17世紀末～18世紀代以前と推定される。

SP101

調査区南東中央寄り，SX101に伴って検出されたピット。東西方向0.28 m，南北方向0.20 mの楕円形を呈している。詳細は不明だが，弥生土器が出土している。

第4節　第2遺構面の遺構・遺物

SK201（第9図）

調査区南側中央，標高13.08 mで検出した土坑。東西方向0.56 m，南西方向0.76 mの楕円形を呈し，深度は0.11 mを測る。断面は船底形を呈し，埋土は砂礫の単層である。

SP201

調査区北東，標高12.83 mで検出したピット。東西方向0.25 m，南北方向0.26 mの円形で，深度は0.06 mを測る。埋没時期は不明である。

SP202

調査区北寄り中央，標高12.99 mで検出したピット。東西方向0.24 m，南北方向0.3 mの楕円形で，深度は0.16 mを測る。埋没時期は不明である。

SP203

調査区北寄り中央，標高12.93 mで検出したピット。径0.21 mの円形で，深度は0.06 mを測る。埋没時期は不明である。

SP204

調査区北寄り中央，標高12.91 mで検出したピット。東西方向0.23 m，南北方向0.14 mの楕円であるとみられるが，北側半分を撹乱に切られている。深度は0.11 mを測る。埋没時期は不明である。

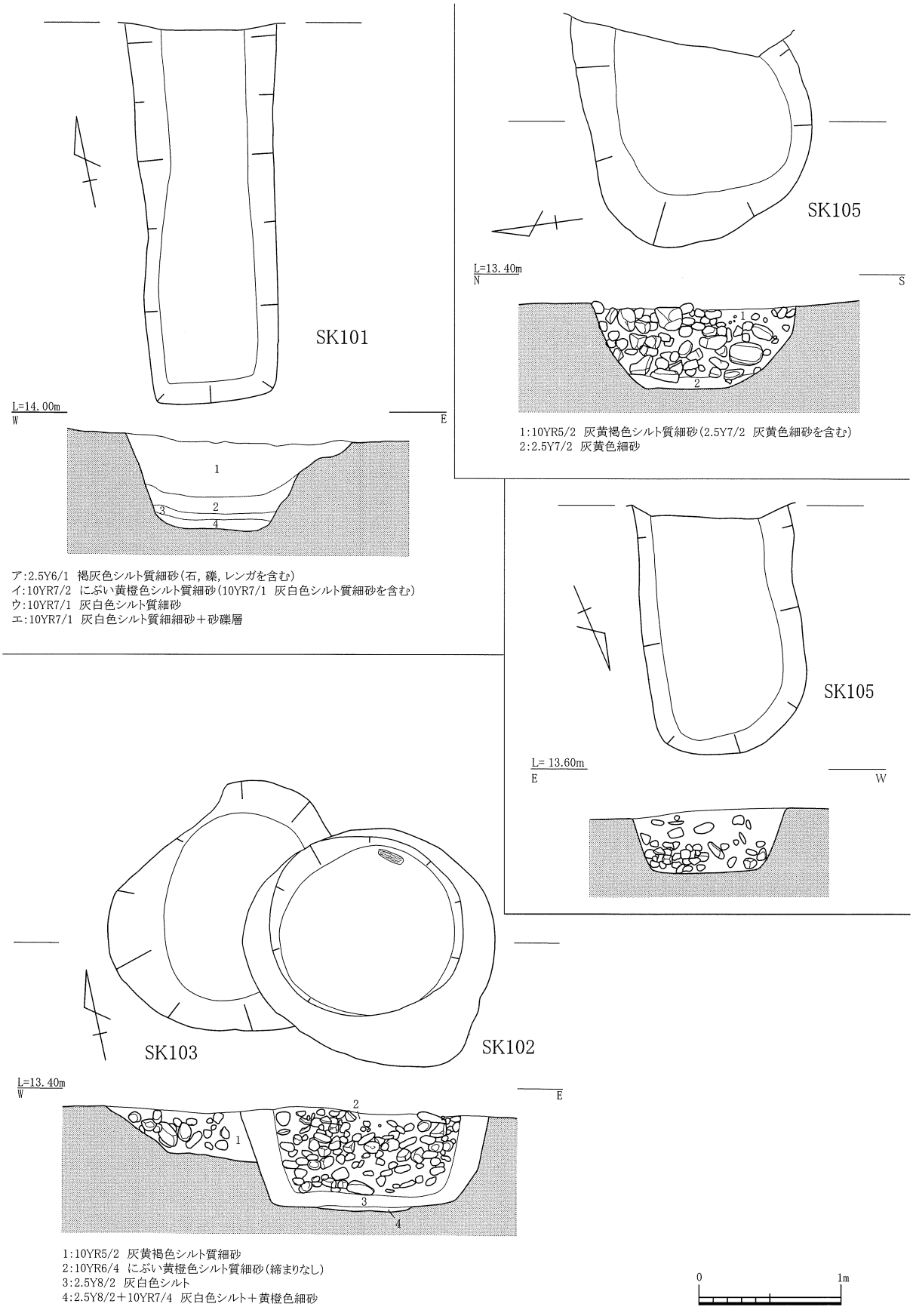
SP205（第8，11図）

調査区北寄り中央，標高12.95 mで検出したピット。北側半分を撹乱に切られているが，検出した東西方向0.71 m，南北方向0.25 mの円形とみられるが，深度は0.23 mを測る。遺物は，弥生土器壺(28)の他に，図化していないが土師質土器が出土している。28は口縁部で，口縁端部に斜格子文が施されている。時期は讃岐第Ⅲ様式（中期）と思われる。接合関係はないが，出土位置及び胎土の特徴からSK103出土の頸部（8）と同一個体と考えられる。遺物により，埋没時期は弥生中期以降と考えられる。

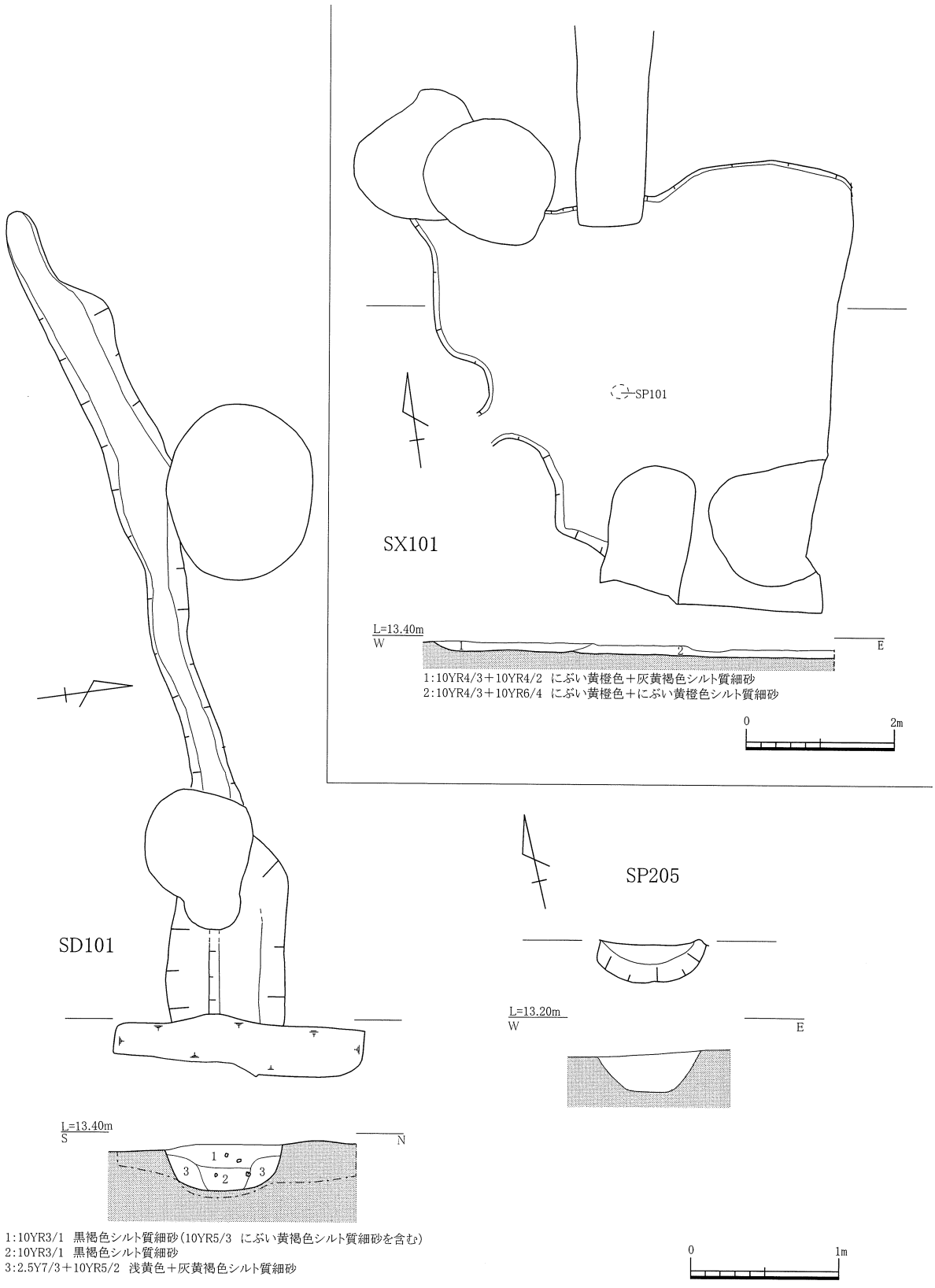
第5節　遺構面精査の遺物

遺構面精査（第11図）

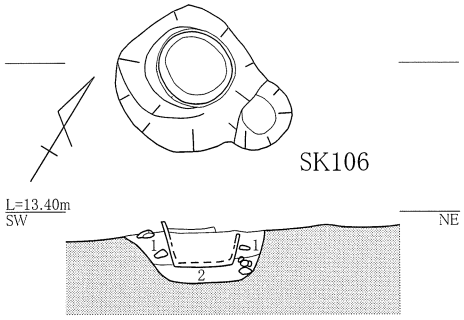
肥前系磁器皿(29)，土師質土器焙烙(30)，土師質土器土管(31)，石鏃(32)が出土している。29は両面に施釉が施されており，内面に蛇ノ目釉ハギの痕がある。内面の一部に呉須（明青色）が認められるため，染付が施されていると考えられる。30は口縁端部で，内面にナデ，外面にナデ・指オサエが施されている。31は外面には丁寧なハケ・ヘラキリ，内面には板ナデが施されている。32はサヌカイトを用いた打製の石鏃で，凹基式である。基部の一部が欠損する。



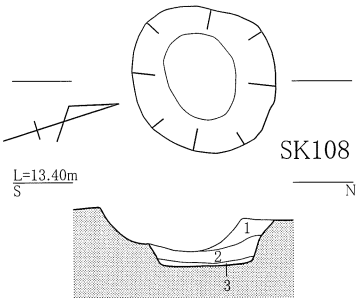
第 7 図　SK101, SK102,SK103,SK104,SK105 平・断面図 (S=1/40)



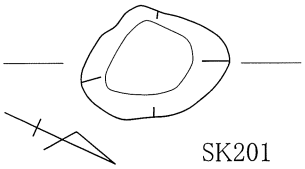
第 8 図 SD101,SX101,SP205 平・断面図 (SD101,SP205 S=1/40)(SX101 S=1/80)



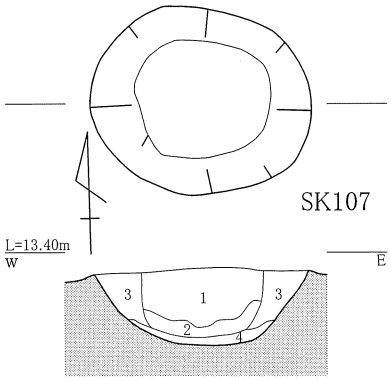
1:2.5Y7/3＋10YR5/2 灰黄色シルト質細砂＋灰黄褐色シルト質細砂(礫を多く含む)
2:10YR5/2 灰黄褐色シルト質細砂(礫を多く含む)



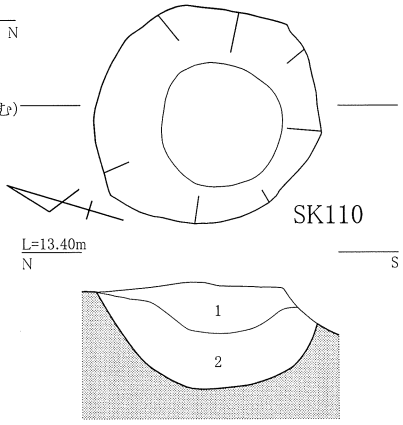
1:10YR7/2＋10YR5/1 にぶい黄橙＋褐灰色シルト質細砂
2:2.5Y8/2 灰白シルト
3:10YR4/1 褐灰色シルト質細砂



1:5Y5/1 灰色砂礫(数mm大の円礫含む)

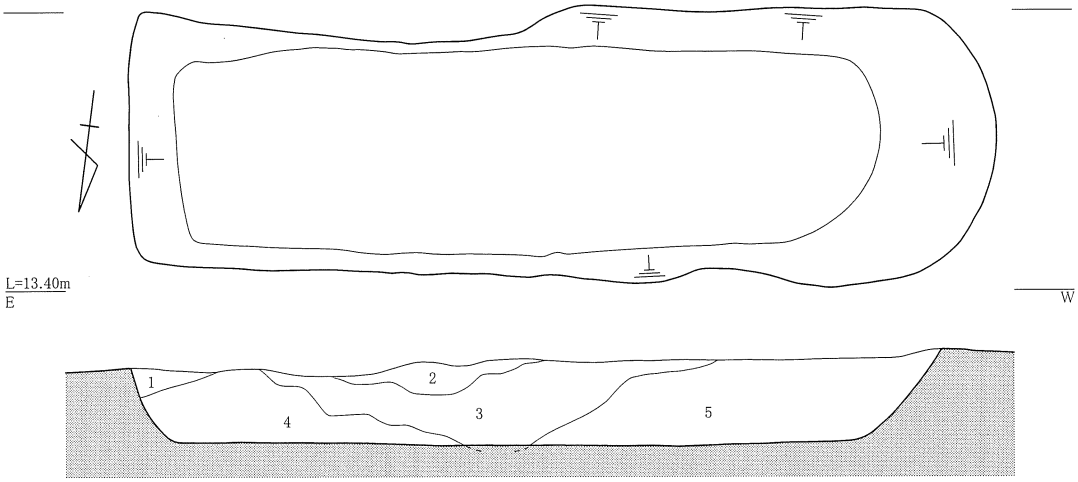


1:10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質細砂(2.5Y8/3 淡黄色シルトを若干含む)
2:2.5Y8/3 淡黄色シルト(1層を含む)
3:10YR6/3 にぶい黄橙色シルト質細砂
4:10YR4/2 灰黄褐色シルト質細砂(礫を含む)

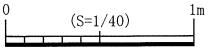


1:10YR2/1 黒色砂混じりシルト(風化礫を含む)
2:10YR4/1 褐灰色砂質シルト

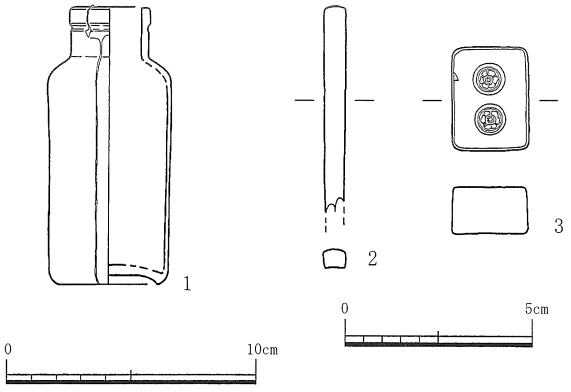
断ち割りトレンチ 南壁断面



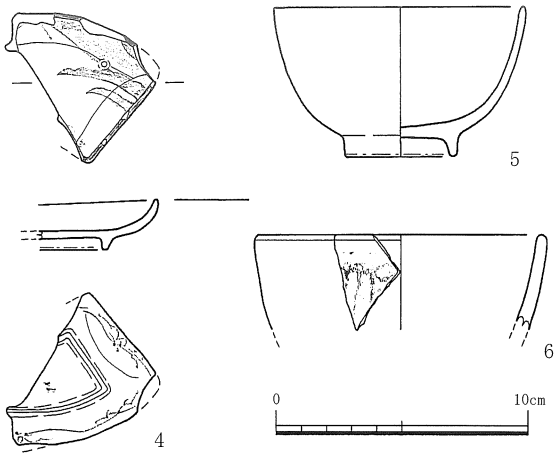
1:2.5Y5/6 黄褐色シルト質細砂(2～3cm)
2:2.5Y4/1 黄灰色砂礫混じりシルト(小円礫を含む)
3:2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト質細砂≒1
4:2.5Y4/1 黄灰色砂礫(シルト質土混じる 小円礫数cm拳大を含む)≒2
5:2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫(シルト質土混じる 円礫拳大～人頭大を含む)



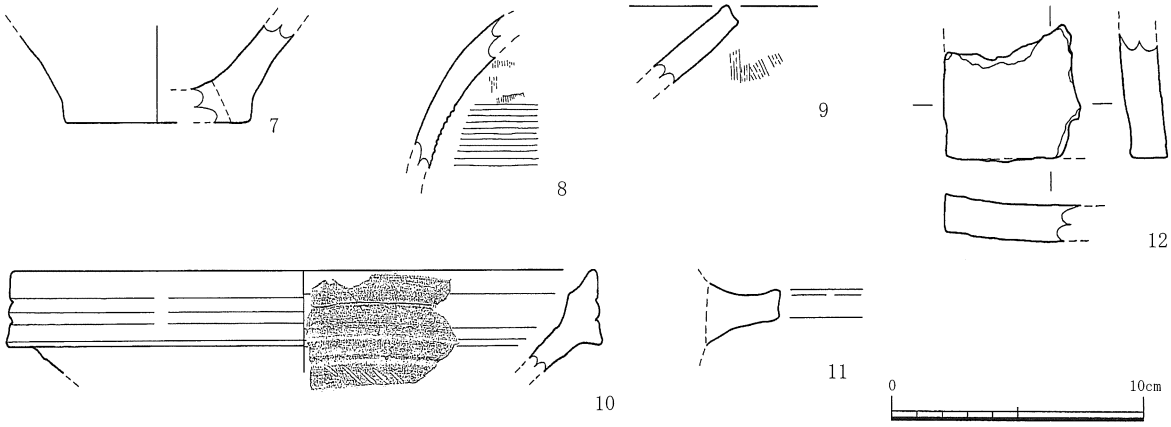
第9図 SK106, SK107, SK108, SK110, SK201, 断割りトレンチ平・断面図 (S=1/40)



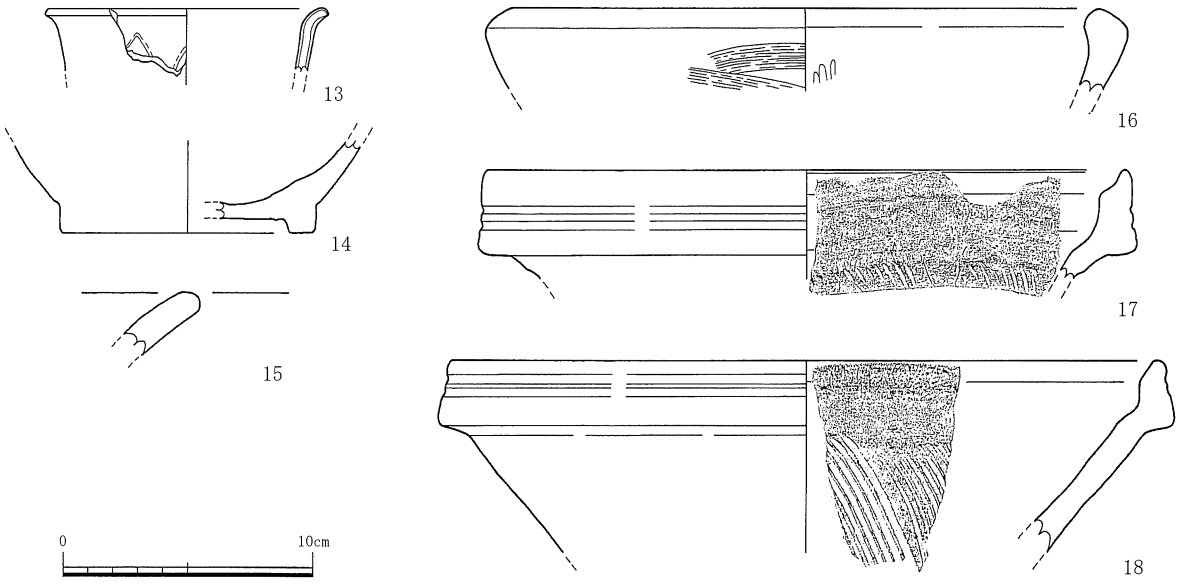
SK101 出土遺物実測図



SK102 出土遺物実測図

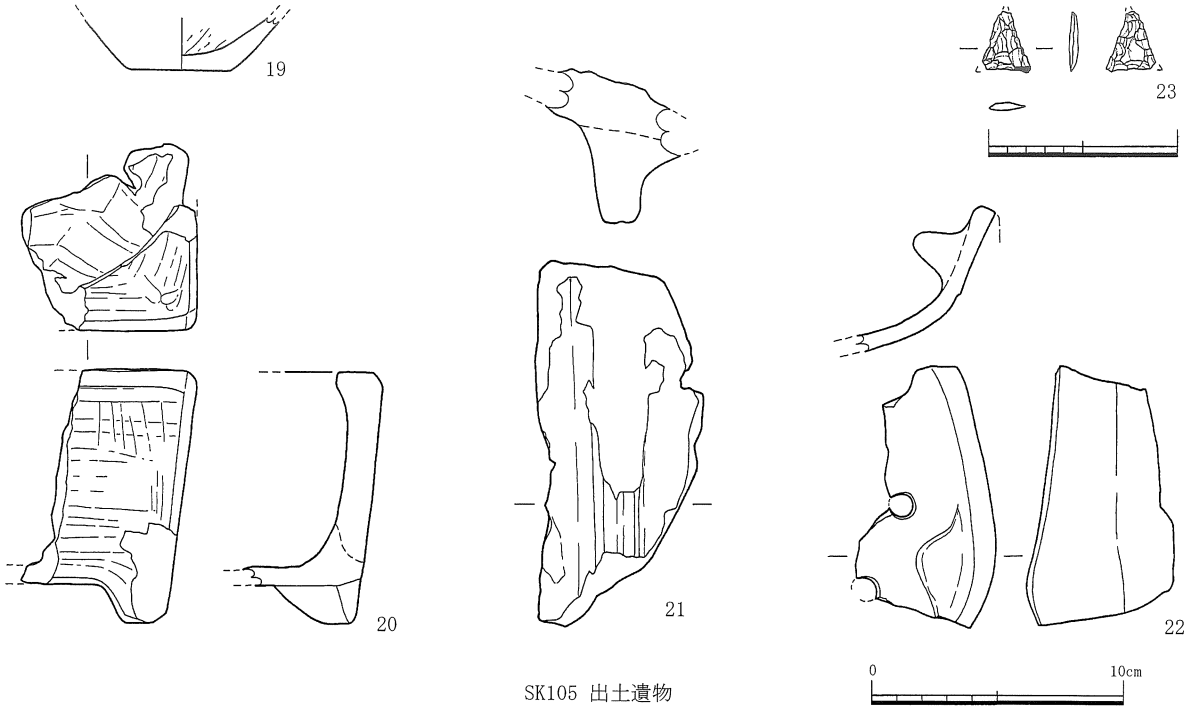


SK103 出土遺物実測図

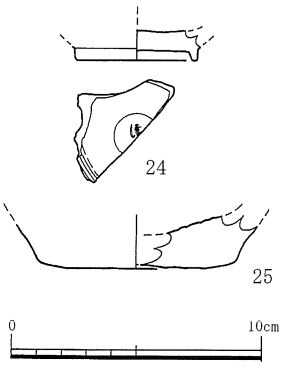


SK104 出土遺物実測図

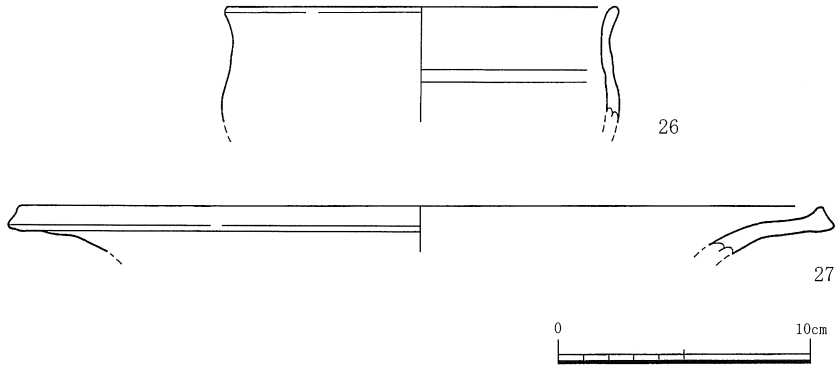
第 10 図 SK101, SK102, SK103, SK104 出土遺物実測図 (S=1/3, 2･3S=1/20)



SK105 出土遺物

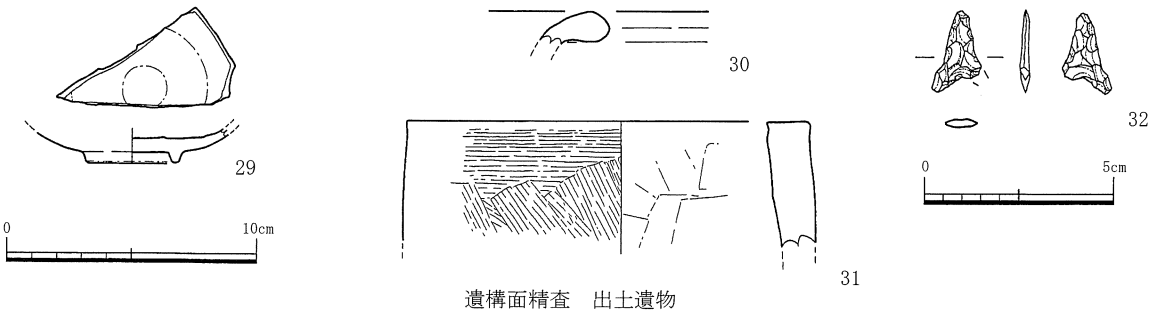


SD101 出土遺物



SX101 出土遺物

SP205 出土遺物



遺構面精査　出土遺物

第 11 図　SK105，SD101，SX101，SP205，遺構面精査　出土遺物実測図（S=1/3，23･32 は S=1/2）

第Ⅳ章　まとめ

第 1 節　遺跡の時期的変遷

(1) 弥生時代

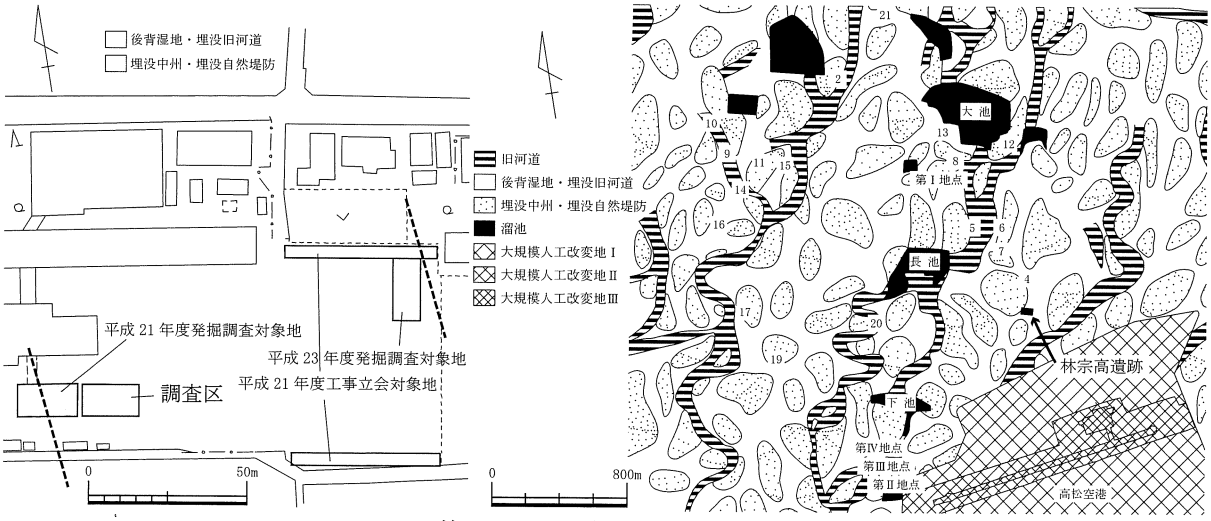
第 2 遺構面で確認したピット群がこの時期に該当する。これらの遺構は小規模な生活痕であるが，調査区の東側に位置する自然堤防の中でもやや不安定な砂層上で認められる。この砂層については，自然堤防の埋没に伴い形成されたことが土層の観察からうかがえる。一方，安定した自然堤防上である西側の砂礫層では遺構は確認できないが，遺物については中期以前に遡るものと，後期後葉のものが出土しており，後期後葉のものは西側に位置する旧河道の出土遺物と，東側の後背湿地の出土遺物と同時期のものである。

(2) 近世～近代

第 1 遺構面で確認した土坑，溝，ピット，性格不明遺構が該当する。所属時期については 17 世紀末～ 18 世紀代，近世末～近代の 2 時期のものが認められる。17 世紀末～ 18 世紀代については，溝および水溜め状の遺構で，近世末～近代については，これらに便槽あるいは風呂釜を伴った遺構が加わる。こうしたことから，少なくとも近世末～近代においては，当地点が居住地となっていた可能性が高い。

第 2 節　遺跡の広がりと旧地形について

林小学校は，大局的に見ると，西側に埋没中州・自然堤防，東側に後背湿地・埋没旧河道が存在する立地で，今回の調査区は埋没中州・自然堤防上に位置している。既往の調査から，学校西部では，平成 21 年度調査の結果，西側で旧河道が確認され，その埋没時には，弥生時代後期後葉の遺物が大量に廃棄されているのが確認された。この旧河道の埋没後においては，鋤溝や畦畔が確認され，プラントオパール，花粉分析の結果から水田として利用されていたことが分かっている。一方，学校の東部については，21 年度の工事立会および 23 年度の調査結果から，後背湿地であり，水田など耕地であった可能性が高い。今回の調査区は，安定した砂礫層が西から東にかけて傾斜し，自然堤防が埋没する過程を確認した。当地点の微高地については，近世末～近代において集落跡が認められるものの，それ以前の状況については，大正時代より利用されている学校施設の影響により，削平を受けた可能性が高く，生活痕が確認することができない。旧河道および後背湿地における弥生時代後期後葉の多量の遺物に反して，微高地上に当該集落の存在が未確認であり，今後その所在の確認が課題となる。



第 12 図　調査地付近位置図

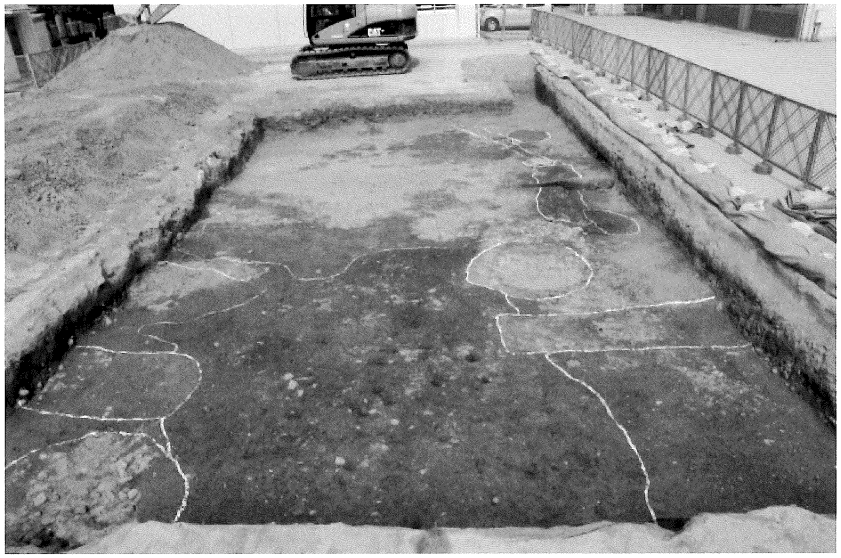
参考文献
・『林宗高遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 127 集　高松市教育委員会 2010 年 3 月
・『林宗高遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 142 集　高松市教育委員会 2012 年 3 月
・『讃岐国弘福寺領の調査』弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書　高松市歴史民俗協会 1992 年 3 月
・『空港跡地遺跡Ⅵ（G 地区）』空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 6 冊　香川県教育委員会他 2003 年3月

第３表　遺物観察表

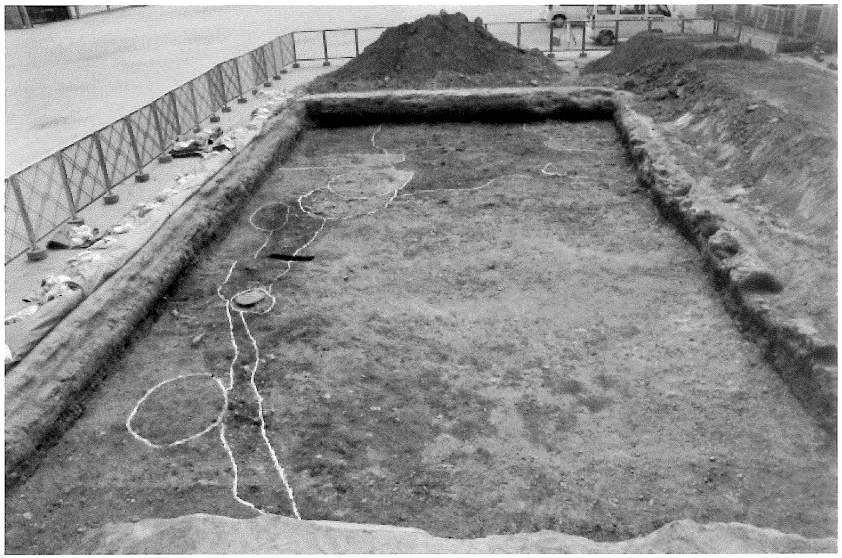
遺物No.	図版No.	遺構名	層位名	種類	器種	法量			調整		色調		胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1	8	SK101	第1面	ガラス瓶	—	3.1	4.0	11.1	なし	なし	7.5YR4/6 褐	7.5YR4/6 褐	精良	良好	型合わせ,気泡が多い
2	7	SK101	第1面	骨角器	点棒	(長径)5.5	(幅)0.6	1.2	研磨	—	10YR4/7 褐	—	精良	—	
3	7	SK101	第1面	骨角器	牌	(長径)2.7	(幅)2.0	1.2	研磨,文様	—	10YR4/6 褐	—	精良	—	文様部分は掘り込んでいる
4	7	SK102	第1面	磁器	皿	—	—	2.0	施釉,染付	施釉,染付	胎土N8/ 灰白,口紅:7.5Y R3/3	淡青色,透明	精良	良好	肥前焼,変形皿
5	8	SK102	第1面	磁器	碗	10.1	4.4	6.0	施釉	施釉	N8/ 灰白	7.5GY8/1 明緑灰,呉須:淡青色	精良	良好	
6	7	SK102	第1面	陶胎染付	碗	(11.6)	—	〔3.8〕	染付	施釉	2.5GY 6/1 オリーブ灰,文様:暗青色	2.5GY 6/2 オリーブ灰	精良	良好	表面に貫入あり
7	6	SK103	第1面	弥生土器	底部	—	7.4	(3.9)	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5YR5/6 橙	2.5YR6/6にぶい橙	粗 2mm以下の長石・石英	良	平底
8	6	SK103	第1面	弥生土器	頸部付近	—	—	(6.1)	ﾀﾃﾊｹ,沈線11条	ﾅﾃﾞ	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR6/4 にぶい黄褐	粗 2mm以下の長石・石英	良	
9	7	SK103	第1面	土師質土器	鍋	—	—	(3.1)	ﾅﾃﾞ,ﾀﾃﾊｹ	ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/7 明赤褐	粗 2mm以下の長石・石英	良	中世
10	7	SK103	第1面	陶器	擂鉢	23.4	—	(4.1)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ,擂目	10YR5/4 赤褐,口縁部付近:10 YR3/2 暗赤褐	10YR5/3 赤褐	普 2mm以下の長石・石英含む	良	備前焼(近世1期b～c)
11	7	SK103	第1面	土師質土器	羽釜	—	—	(2.5)	ﾅﾃﾞ	—	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	粗 3mm以下の砂粒含む	良	古代
12	7	SK103	第1面	土師質土器	平瓦	(5.5)	(5.5)	1.5	(凸面)ﾅﾃﾞ,ｹｽﾞﾘ	(凹面)ﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	粗 2mm以下の長石・石英	良	
13	6	SK104	第1面	磁器(青磁)	碗	11.0	—	(2.5)	連弁?,染付,施釉	施釉	7.5GY6/1 緑灰	7.5GY6/1 緑灰	良	良	龍泉窯系青磁か?
14	6	SK104	第1面	陶器	底部	—	10.1	〔3.7〕	回転ﾅﾃﾞ,ｹｽﾞﾘ,塗土	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR4/3 褐	良 1mm以下の石英含む	良	
15	6	SK104	第1面	土師質土器	鍋(煮炊き用)	(34.2)	—	〔2.5〕	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	7.5YR 4/4 灰褐	7.5YR 6/4 にぶい橙	粗 赤色粒と金雲母・長石・石英含む	良	中世
16	6	SK104	第1面	土師質土器	擂鉢	23.6	—	(3.3)	ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ,擂目	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	粗 4mm以下の長石・石英	良	
17	7	SK104	第1面	陶器	擂鉢	25.7	—	(4.35)	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ,擂目	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	普 2mm以下の石英含む	良好	備前焼(近世1期c～2期a)
18	6	SK104	第1面	陶器	擂鉢	28.6	—	(7.7)	ﾅﾃﾞ,重ね焼痕	ﾅﾃﾞ,擂目	N5/ 灰	N5/ 灰	普	良好	備前焼(近世1期c～2期a)
19	6	SK105	第1面	弥生土器	底部	—	4.0	(2.1)	ﾏﾒﾂ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	7.5YR8/6 浅黄橙	5YR7/6 橙	粗 長石・石英含む	良	外面黒斑
20	8	SK105	第1面	瓦質土器	火鉢	—	—	10.1	ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	ヨコ方向タテ方向板ナ	N2/0 黒	N3/0 黒	普	良好	
21	8	SK105	第1面	土師質土器	風呂釜	—	—	〔6.2〕	ﾅﾃﾞ,ヨコ方向ﾅﾃﾞ	ヨコ方向ナデ,指オサエ	5YR5/6 明赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	粗 1mm～2mm長石・石英含	良	
22	8	SK105	第1面	土師質土器	七輪	—	—	(6.0)	剥落	ﾅﾃﾞ	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	普 2mm以下の長石・石英	良	煤付着,目穴2ヶ残存
24	8	SD101	第1面	陶器	碗	—	4.8	(1.15)	回転ﾅﾃﾞ,無釉,刻印(底部裏)	回転ﾅﾃﾞ,施釉	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	精良	良	肥前系京焼風,「清」の刻印有
25	6	SD101	第1面	弥生土器	底部	—	8.0	(2.1)	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	5YR5/8 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	粗 4mm以下の長石・石英	良	
26	8	SX101	第1面	陶器	碗	15.6	—	(4.6)	施釉	施釉	5Y7/1 灰白	5Y6/2 灰オリーブ	普 0.5mm以下の砂粒含む	良	
27	6	SX101	第1面	弥生土器	広口壺	32.4	—	1.9	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/5 にぶい褐	普 1mm以下の長石・石英・雲母含む	良	讃岐第Ⅴ様式(後期～末)
28	6	SP205	第2面	弥生土器	口縁部壺	16.0	—	1.7	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ,指オサエ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR 6/4にぶい黄橙	普 3mm以下の長石・石英	良	讃岐第Ⅲ様式(中期)
29	7	遺構面精査	第1面	磁器	皿	—	3.8	(1.4)	施釉	施釉,蛇ノ目釉ハギ	5Y8/1灰白	5Y8/1 灰白,呉須:明青色	精良	良	肥前焼系
30	7	遺構面精査	第1面	土師質土器	焙烙	—	—	(1.2)	ﾅﾃﾞ,指オサエ	ﾅﾃﾞ	10YR7/2 にぶい黄橙	5Y6/1 灰	普 1mm以下の長石・石英	良	
31	7	遺構面精査	第1面	土師質土器	土管	〔15.2〕	〔5.0〕	1.6	ﾊｹ,ﾍﾗｷﾘ	板ナデ	7.5YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	普 1mm以下の砂粒含む	良	

第４表　石器観察表

遺物No.	図版No.	遺構面	層位名	種類	長径	幅	厚	重	備考
23	7	SK105	第1面	石鏃	2.1	1.4	0.2	0.6	平基式，打製，サヌカイト製
32	7	遺構面精査	第1面	石鏃	1.65	1.3	0.2	0.5	凹基式，打製，サヌカイト製



第 1 遺構面検出状況（東から）



第 1 遺構面検出状況（西から）

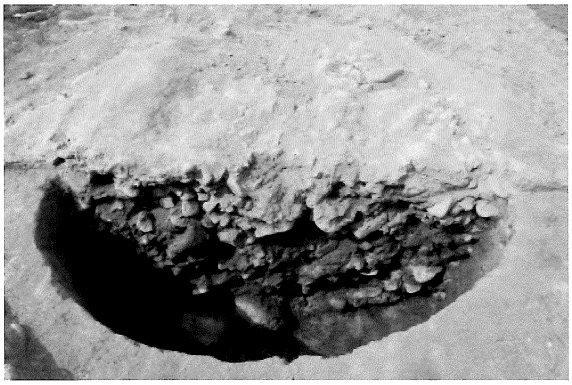
第 1 遺構面 全景（東から）

第 2 遺構面 全景（東から）

図版 2

SK101 完掘（南から）

SK102,SK103 完掘（南から）



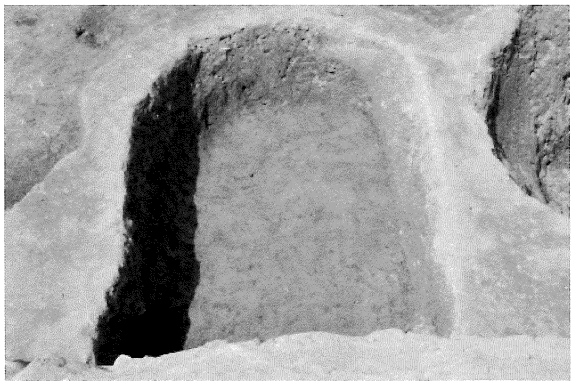
SK102 断面（南から）

SK102 完掘（南から）

SK104 断面（西から）

SK104 完掘（南から）

SK105 断面（北から）



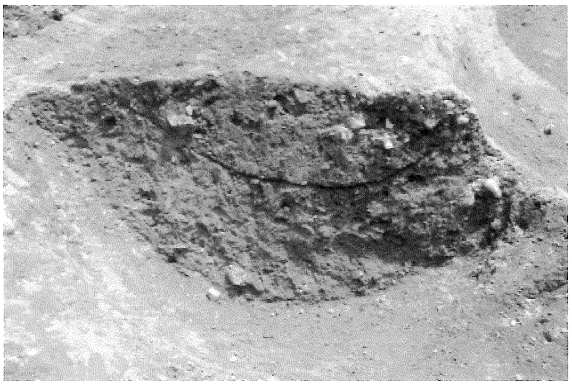
SK105 完掘（南から）

図版 3

SK106 完掘（南から）

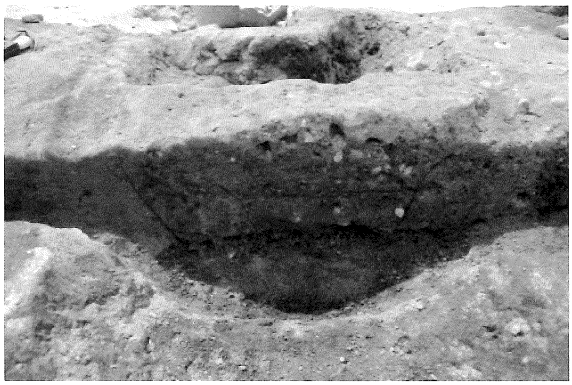
SK107 断面（南から）

SK107 完掘（南から）



SK110 断面（西から）

SK110 完掘（東から）



SD101 断面（東から）

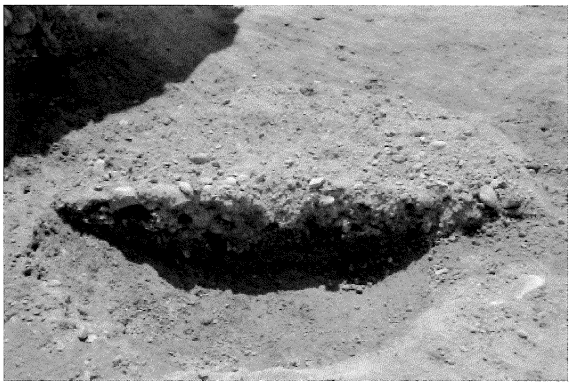
SD101 完掘（北西から）

SD102 完掘（北東から）

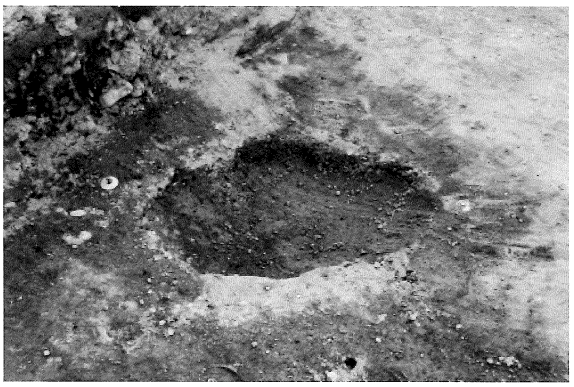
図版 4

SX101 畦断面（南西から）

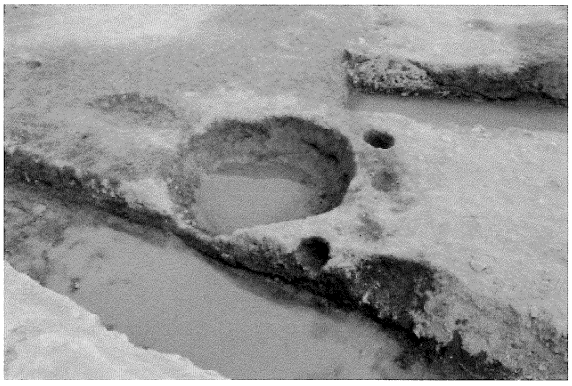
SX101 完掘（南西から）



SK201 断面（東から）



SK201 完掘（東から）



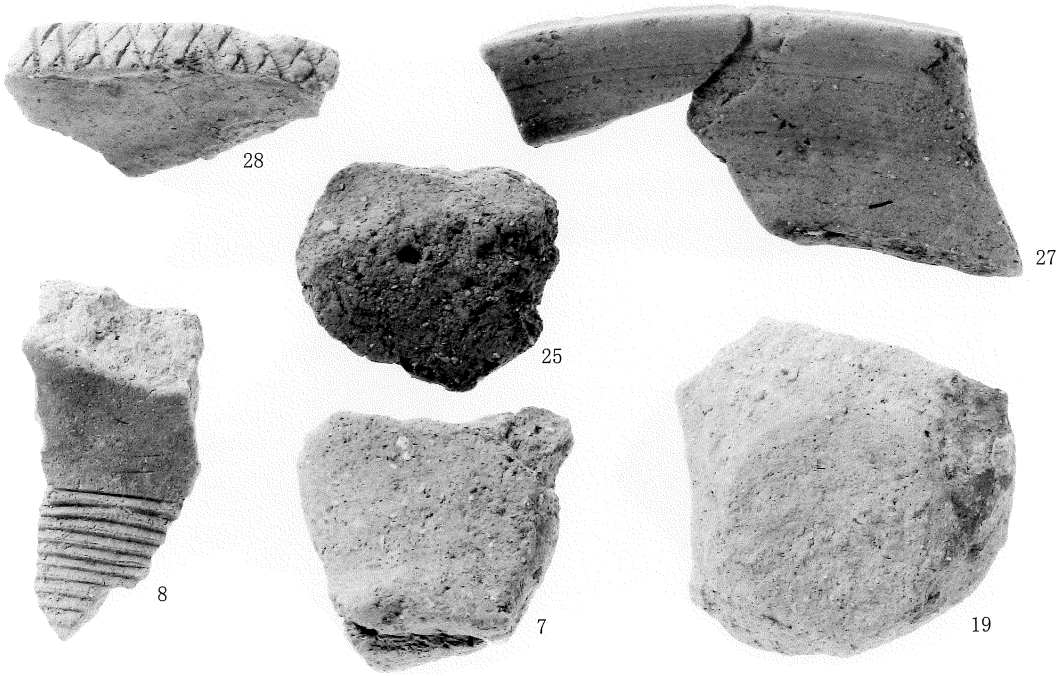
SP202,SP203,SP204,SP205 完掘（北から）

断ち割りトレンチ 断面（北西から）

北壁土層（東南から）

東壁土層（西から）

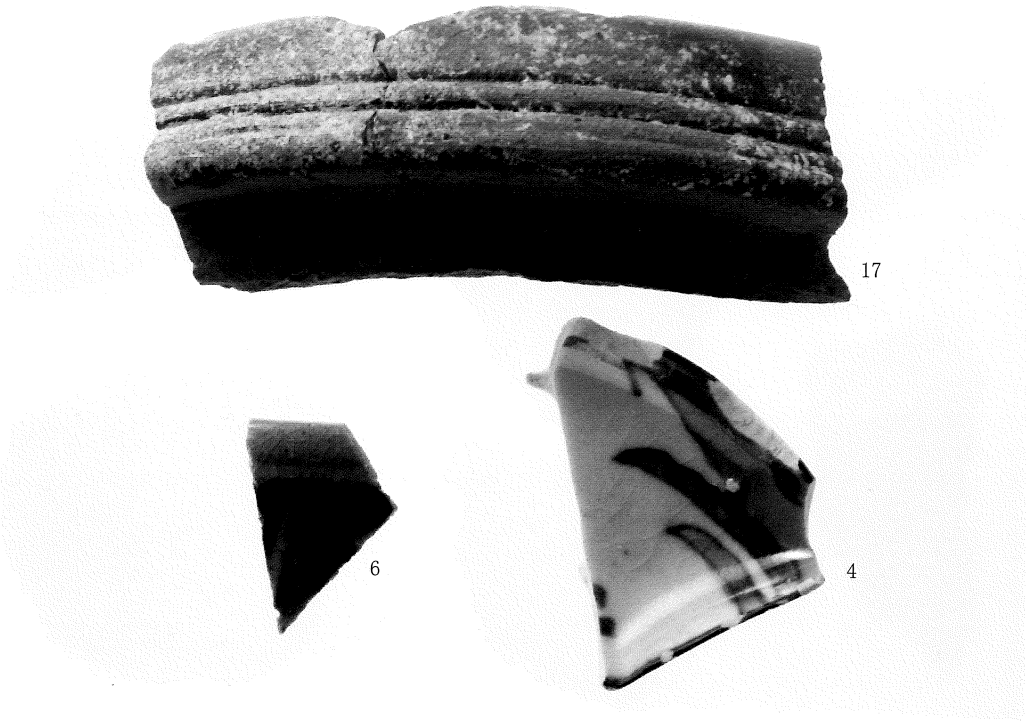
図版 5



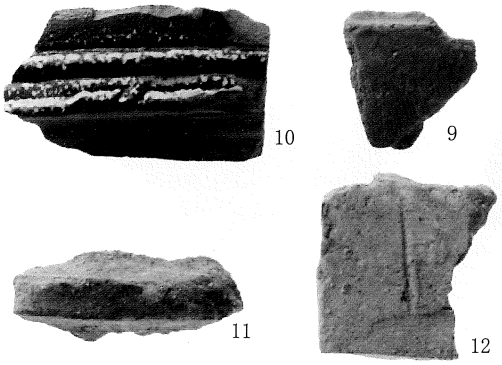
出土弥生土器

SK104 出土遺物

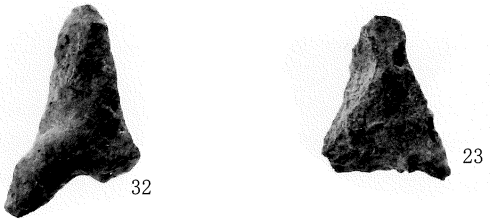
図版 6



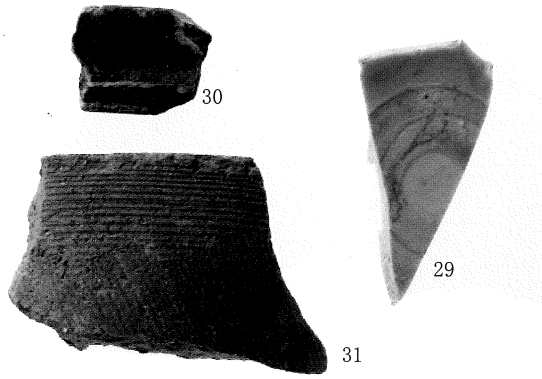
SK102,SK104 出土遺物



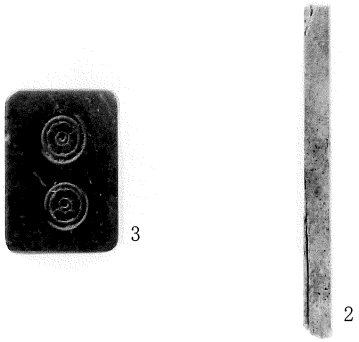
SK103 出土遺物



出土石器



遺構面精査出土遺物

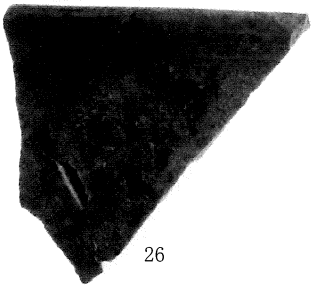


出土骨角器

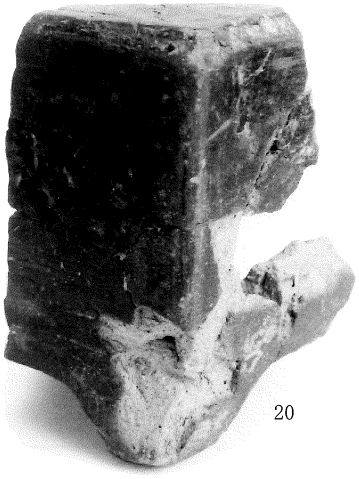
図版 7

SK105 出土遺物

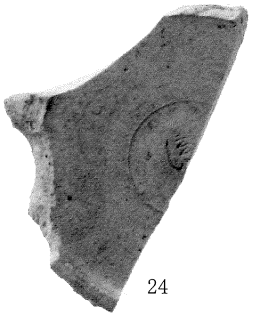
出土ガラス瓶



SX101 出土遺物



SK105 出土遺物



SD101 出土遺物

SK102 出土遺物

SK105 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	はやしむねたかいせき だいさんじちょうさ
書　　名	林宗高遺跡 ―第3次調査―
副 書 名	高松市立林小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第154集
編著者名	小川 賢，新井場 萌
編集機関	高松市教育委員会
所 在 地	〒760－8571 香川県高松市番町一丁目8番15号　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
はやしむねたか 林 宗 高 いせき 遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 はやしちょう 林 町	37201		34° 18′ 4″	134° 4′ 11″	2013.7.22 ～ 2013.8.21	123 ㎡	校舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はやしむねたかいせき 林 宗 高 遺 跡	集落	弥生時代 近世以降	溝,土坑,ピット	弥生土器,石鏃 土師器,陶磁器,須恵器,風呂釜	

要　　約

林小学校内に所在する林宗高遺跡の内，微高地上を調査した。今回は弥生時代の遺物と，近世・近代の遺構遺物が確認されたに留まり，集落の存在確認が今後の課題である。

高松市埋蔵文化財調査報告第154集

林小学校校舎建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

林宗高遺跡

―第3次調査―

平成26年3月31日

編　集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番15号
発　行　高松市教育委員会
印　刷　有限会社　河端商会